

## 感染症に抵抗する人間 ——八丈島にてカミュ『ペスト』を読む<sup>1</sup>

西山雄二

2020年初頭から新型コロナウイルスの感染が拡大し、中国からヨーロッパへ、アメリカやアフリカへと世界的な大流行を引き起こしています。日本やヨーロッパでは春先に第一波のピークが訪れ、少なからぬ国や都市では厳しい外出制限をとまなう隔離措置が取られました。第一波が過ぎ去った地域では人々は多かれ少なかれ安堵したのですが、それもつかの間、感染第二波、第三波が徐々に到来して、私たちが苦しめ続けています。

疫病の世界的大流行のさなか、アルベール・カミュの『ペスト』がフランスやイタリアなどのヨーロッパ各国だけでなく、アメリカや韓国でもベストセラーとなり、日本でも熱心に再読されています。イタリアとフランスでは感染者が出始めた1月から売れ始め、例年と比べて前者では3倍、後者では4倍の売れ行きだそうです。2020年1月はカミュの没後60年に当たる節目なので、その影響があったのかもしれない。イタリアのネット書店ibis.itで、『ペスト』は外国小説部門で3位に急上昇しました<sup>2</sup>。フランスでは2015年11月のパリ同時多発テロの際にはヘミングウェイの『移動祝祭日』が、2019年4月のパリ・ノートル＝ダム大聖堂の火災の後でヴィクトール・ユゴーの『パリのノートル＝ダム』が爆発的に読まれました。歴

---

<sup>1</sup> 本稿は、2020年9月5日に実施された第79回八丈島民大学講座での講演をもとに、大幅に加筆されたものです。講座を企画・運営していただいた伊藤宏氏、茂手木清氏、黒川信氏には感謝申し上げます。また、気鋭のカミュ研究者・渡辺惟央氏からも貴重な助言をいただきました。

<sup>2</sup> « En pleine épidémie de coronavirus, les ventes de *La Peste* de Camus s'envolent. », *Le Figaro*, le 4 mars 2020.

史的悲劇の後、人々は文学的想像力を通じて悲惨な現実を耐え抜こうとするのでしょう。『ベスト』は予期しえなかった災厄に直面した人間の姿を映し出す鏡であり、人々はこの鏡のなかに問いと答えを探し出そうとします。フランスの「レゼコー」紙の記事によると、「『ベスト』は結局、答えよりも多くの問いを読者に残します。カミュの偉大な功績は数々の確信にこだわらなかったこと、咎めるべき原因を早急に示したことです。これがおそらくこの本の大きな力のひとつであり、その非時間的で普遍的な側面をもたらしているのです。つまり、カミュにとって重要なのは、破局論も精神的な純粹主義も拒むことです」<sup>3</sup>。

『ベスト』に対する日本での関心の高まりは驚くべき状況で、新潮文庫版の日本語訳は、2020年2月以降12回、36万4,000部を増刷し、累計発行部数が160万部を突破したそうです。新潮文庫版は1955年に刊行されたましたが、近年の増刷は年間5,000部程度だったので驚異的な勢いです<sup>4</sup>。緊急事態宣言が出された4月頃はとくに飛ぶように売れており、書店には「お一人様一冊まで」というポップが置かれました（その写真は国際カミュ学会の会報の表紙写真に使用されたそうです<sup>5</sup>）。漫画として、『ベスト』の主人公の名前に言及して、感染症との戦いを描いた朱戸アオの作品『リウーを待ちながら』（講談社）があり、こちらも再版されるほど読まれました。今回のコロナ渦を受けて、車戸亮太によって原作の漫画化され（『ベスト』）、Webコミックサイト「Bバンチ」にて2020年6月から連載されています。

2020年1月23日、中国・湖北省の武漢市に対して、当局は突然、都市封鎖の指示を出しました。日本では聞き覚えのない都市封鎖という深刻な事態が隣国で起きていることに驚き、私自身、直感的に、まるで『ベスト』の世界だなと感じました。『ベスト』は日々の状況や出来事を時系列順に綴るクロニクル形式で書かれており、その記録者は渦中にある医師リウーと若者タルーです。武漢の場合、現地に住む作家・方方（ファンファン）がブログで都市封鎖の現実を伝える日記を綴りまし

<sup>3</sup> « Camus : “La seule façon de mettre les gens ensemble, c'est encore de leur envoyer la peste” », *L'Écho*, le 20 mars 2020. 哲学教師Maryline Maesoの談話。

<sup>4</sup> Cf. 「累計160万部突破 カミュ『ベスト』マンガ化決定」、2020年6月19日、<https://news.yahoo.co.jp/articles/b4ade0dfca0ec846ed09ddcaa62a9efd4f7c28c4>

<sup>5</sup> Cf. 相澤伸依×渡辺惟央「敗北しながら反抗を続ける人々の物語——『ベスト』再読とフーコーの思想」、『週間読書人』2020年7月3日号。

た<sup>6</sup>。中国政府やメディアが伝える情報では不十分と感じた数多くの中国人は、よりリアルな事実を得るために、彼女のブログを熱心に読んだといいます（実際、中国当局は方方のブログの一部を不適切とみなして削除しました）。イタリアでも作家パオロ・ジョルダノは非常事態下のローマで、感染症に関するエッセイを日々綴っています。その集成は『コロナ時代の僕ら』として出版され、大きな反響を呼びました<sup>7</sup>。

日本でも円城塔らが『コロナ禍日記』（タバックス）を公刊するなど、クロニクル形式でコロナ禍の生活を書き記す作家は少なくありませんでした。感染症流行のなか自宅にとどまる生活で日々の記録として文学活動を続けることは可能だったわけです。2011年の東日本大震災のことを参照すると、いち早く現地で表現活動をおこなったのは映像作家たちでした。たとえば、森達也、綿井健陽、松林要樹、安岡卓治は震災二週間後に被災地に入って『311』を製作しましたが、撮影者たる彼らの行動や反応も生々しく描かれており、物議を醸し出しました。災厄に見舞われた現場があり、苦しむ人々がいるからこそ、映像作家らはその現実を記録し、表現しようとしたのでしょう。ただ、今回の世界的大流行の場合、災厄はいたるところにあり、誰もが非日常的な生活に苦しんでいます。個人々が感染症の危険と日々隣り合わせで、災厄の現場を生きています。そうした状況では、各人が言葉によって日々の記録をクロニクル形式で書き留める試みはきわめて実践的なのです。

### カミュの『ペスト』——20世紀の感染症文学の金字塔

1947年に発表された『ペスト』は『異邦人』（1942年）に次ぐカミュの代表的な長編小説です。アルジェリアのオラン市で春先にペストが発生し、5月に都市が封鎖されます。外の世界から隔離された状態で、医師のリウーらが保険隊を結成し、「悪」と闘う様子が年代記風に描かれています。ペストは日常生活を変質させ、人間性を蝕む「不条理」そのものであり、この不条理に反抗する人間の諸相が浮き彫りになるのです。

ペスト流行下で隔離生活を送る男女が物語る話を記述したボッカッチョの『デカ

<sup>6</sup> 方方『武漢日記——封鎖下60日の魂の記録』飯塚容・渡辺新一訳、河出書房新社、2020年。

<sup>7</sup> パオロ・ジョルダノ『コロナの時代の僕ら』飯田亮介訳、河出書房新社、2020年。

メロン』(1349-1353年)、ロンドンで実際に起きたペスト大流行の史実を織り交ぜて執筆されたデフォーの『ペストの記憶』(1722年)など、ヨーロッパではすでに感染症文学の系譜があります。古くはホメロスの叙事詩『イリアス』の第一歌において、トロイア戦争における悪疫の流行が描かれています。神ポイボス・アポロンを奉る神官の娘がギリシア軍に捉えられ、將軍アガメムノーンの愛人とされてしまいます。神官は貢物を持参して、娘の解放を懇願しますが、アガメムノーンは彼を侮辱します。神ポイボス・アポロンは神官の復讐として、ギリシア軍に無数の矢を放って、疫病を蔓延させ、娘を解放させるのです。ここではすでに戦争と疫病の密接な関係が示されており、私たち人間は蔓延する病との戦争状態に巻き込まれるのです(コロナ感染状況においても戦争のメタファーは頻繁に使用されています)。神が放った疫病は人間界の外から到来する未知なる災いで、人間同士の争いを終結させるほどの上位の悪なのです。

カミュの『ペスト』は20世紀の感染症文学の金字塔として、その後の作品にも影響を与え続けています。文学研究者オレリー・パリュは最近刊行された著作『想像界の感染——現代の疫病の物語におけるカミュの遺産』<sup>8</sup>において、『ペスト』の重要性を指摘しています。1980~2000年にはエイズの世界的流行とともに感染症文学、たとえば、アンドレ・ブリンク『ペストの壁』(1984年)、ガブリエル・ガルシア＝マルケス『コレラの時代の愛』(1985年)、フアン・ゴイティソーロ『孤独な鳥の美德』(1988年)、ジョゼ・サラマーゴ『白の闇』(1995年)、ル・クレジオ『隔離の鳥』(1995年)が発表されましたが、これらはカミュの小説を刷新する試みだとされます。

さて、『ペスト』の構成ですが、この小説は古典的悲劇の形式で5章構成になっています。

まず第1章では、語り手によって通常のオラン市の様子が描写されます。4~5月、血を吐きながら死んでいく不吉なネズミが現れ、次いで第一の犠牲者が出ます。しかし、県知事は何の対策も打つことなく時間が過ぎていきます。5月に死亡率の増加が顕著になると、県知事は「ペストの流行」を宣言し、オラン市を閉鎖

<sup>8</sup> Aurélie Palud, *La contagion des imaginaires, L'héritage camusien dans le récit d'épidémie contemporain*, Presses universitaires de Rennes, 2020.

します。

第2章では、5～7月にかけてペストが市中に蔓延し始め、住民たちを襲い始める様子が描かれます。外部から隔離されることによって、彼らは追放と別離を日常的に実感することになります。医師リウーの提案でペストに対抗する有志の保健隊が結成されますが、ペストの勢いは夏の到来によりさらに増大します。

第3章では、8月に夏の暑さが高まり、ペストの流行が頂点を迎える状況が綴られます。会話の場面はほとんどなく、ペストによって混乱していく孤立した街の情景（埋葬、死体焼却炉、別離による人々の苦悩）が描かれます。

第4章で描かれるのは、9～12月にペストが依然としてその猛威をふるうなかで継続される人々の格闘です。ペストはその症状を変化させ、腺ペストから肺ペストへと移行します。死亡者は出続けますが、この頃になると血清によって回復する事例が出てきます。

第5章では、1～2月のペストの終息期が記されます。判事オトンや若者タルーにもペストが襲いかかり、死者は出続けていますが、しかし、ペストの勢いは少しずつ減少します。疫病は収束へと向かい、オラン市はついに開放されます。

エピローグでは、本書の語り手がリウーであったことが明かされます。ペストの終息を人々が祝うなか、リウーはペストに対する勝利が最終的なものではないと語ります。

### ペストのアレゴリー

この小説において、ペストはさまざまな次元の悪を表象しています。説明のつかないもの、得体の知れないものをアレゴリー的に表現するべく、ペストは少なくとも次の三つの次元を指し示しています。

まず、現実で具体的な次元で、ペストは感染症の病気のことです。ペストは中世ヨーロッパで猛威を振るった病気で、鼠などを介して動物から人間へ、また人間のあいだで感染が進行する「黒死病」と呼ばれていました。小説では、喀血して死んだ鼠の姿から、ペストのさまざまな症状と進行など、ペストの医学的、臨床的、社会的な描写が盛り込まれています。実際、カミュは小説の長い準備段階において（彼の『手帖』にペストの文字がはじめて記されるのは1940年10月でした）、アドリアン・ブルースト『ヨーロッパにおけるペストとの戦い』（1897年）など、大量の

資料を読み込んだのでした。

次に、隠喩の次元があります。『ペスト』が刊行された1947年、読者はペストに戦争への示唆を読み取り、とりわけ「褐色のペスト」と呼ばれたナチスドイツのことを思い出しました。さらに保健隊の格闘は、フランスのドイツ占領期間におけるレジスタンス活動を想起させます。実際、カミュが『ペスト』の執筆を始めたのは、1942年9月、第二次世界大戦の最中で、小説の構想において彼はペストを戦争のアレゴリーとしていました。戦争とは人間が生み出した悪であり、この悪を克服するのも連帯した人間であるというわけです。奇しくも、2020年3月、フランスのマクロン大統領は新型コロナウイルスの感染流行との闘いを「戦争」と表現しました。これに対して「奇妙な戦争」という表現も広がりました。「奇妙な戦争」とは、第二次世界大戦初期、英仏とドイツが交戦状態に陥りながらも戦闘が起こらなかった状態を指す表現です。ウイルスという見えない敵から身を守るために隔離生活を続けるしかない状況は、たしかに戦争と呼ぶにはいささか違和感があるのです。人類学者のフレデリック・ケックはこう問いかけています。「カミュは戦争を考えるためにペストの隠喩を用いるのに対して、私たちは新型コロナウイルス感染を考えるために戦争の隠喩を用いますが、1947年と今日では問題は同じなのです——災厄が周期的に回帰するという現実に私たちが備えるために、想像力の資源をいかに利用すればいいのでしょうか」<sup>9</sup>。カミュの小説と私たちのコロナ禍では戦争と感染症をめぐる、現実と隠喩の関係が逆になっていますが、重要なことは、その両者をつなぐ想像力を批判的に洗練させることなのです。

そして、もっとも抽象的な次元でもペストという言葉が用いられます。この場合、ペストは非人間的な災禍で、人々を悲惨へと突き落とす絶対的な悪の象徴です。たとえば、第4章で海を見ながら青年タルーが医師ルーに打ち明ける回想にはペストの表現が用いられます。タルーはまず、「僕はこの町や今度の疫病に出くわすずっと前から、すでにペストに苦しめられていたんだ」(283/363)<sup>10</sup>と話を切り

<sup>9</sup> Frédéric Keck, « Guerre d'occupation et morts en série - sur *La Peste* d'Albert Camus », AOC media, le 27 avril 2020. <https://aoc.media/critique/2020/04/26/guerre-doccupation-et-morts-en-serie-sur-la-peste-dalbert-camus/> (以下、ウェブサイト掲載の論考についてはすべて2020年12月25日に閲覧確認)

<sup>10</sup> 以下、カミュ『ペスト』の引用は、ガリマール文庫版 (Camus, *La peste*, Gallimard folio,

出します。彼の父親は次席検事を務めており、ある日、重罪裁判所でのある重大な事件の論告に若きタルーを招きます。会場の誰もが被告の有罪を望んでおり、検事たる父親は「社会の名においてこの男の死を要求します」(286/368)。清廉潔白に生きてきたと信じていたタルーはこの瞬間、むしろ罪人の方に親近感を抱き、「もっとも卑劣な殺人」(286/368)がなされていると衝撃を受けます。タルーはしばらくして家を出ていき、「ペスト患者になりたくなかった、ただそれだけ」(287/371)という理由で政治活動に身を投じます。理不尽な殺人に抗するべく数々の社会闘争に参加しても、彼の心の平和は得られません。歴史を通じて大なり小なりの殺人が起り、誰もがその歴史的・社会的な因果に関与している以上、「私たちはみなペストのなかにいるのだ」(290/375)という結論に彼は至るのです。

ペストが表象する三つの次元について、現在こう述べる評者もいます。「長い間、この小説の形而上学的な読解（不条理や人間の有限性、さらには悪の象徴としてのペスト）や政治的な読解（ファシズムの隠喩としてのペスト）が特権視されてきたが、今日、私たちはもっとも逐次的な解釈を好むようにみえます」<sup>11</sup>。現在の状況に生々しく響くのは、むしろ『ペスト』のリアリズム的な側面でしょう。たしかに、政治家たちは戦争の隠喩を用いて、ウイルスとの闘いを勇ましく演出したり、「中国ウイルス」と連呼して敵対的ナショナリズムを煽ったりしています。ただ、発生源である中国を指弾したとしても、世界的大流行に対してはむしろ国際間の連帯と協力こそが感染症の終息には重要です（実際、当の中国は世界中にマスクの提供もおこないました）。ウイルスだけが一方的に憎むべき敵なのではなく、むしろ生態系のバランスを破壊する人間の側にこの災厄の責任はあるのですから。

### カミュによる感染症社会の描写と現在のコロナ渦

『ペスト』を読むと、現在のコロナ渦の社会状況を予見しているかのようで、いま起こっている出来事に類似した事象が克明に描かれている点に驚かされる——今

---

2019) / 新潮文庫の日本語訳（宮崎嶺雄訳、1969年）の頁数を丸括弧内に記します。日本語訳は宮崎訳を参照しつつ、適宜変更されています。

<sup>11</sup> « Camus : “La seule façon de mettre les gens ensemble, c’est encore de leur envoyer la peste” », *art. cit.* 哲学教師Maryline Maesoの談話。

日、この小説を読む人々がこうした感想を吐露しています<sup>12</sup>。以下、そうした事例を列挙していきましょう。

「あるカフェが「純良な酒は黴菌を殺す」というビラを掲げたので、アルコールは伝染病を予防するという自然な考え方が一般の意見のなかで強まってきた。」(98/115) 現在のコロナ渦では、免疫力を高めて感染を防止するとの情報から納豆やニンニク、海藻のアオサ、オリーブ葉やタンポポエキスが次々と注目されました。マスメディアに加えてSNSの発達によって、災厄時にこの種の情報は拡散されるようになりました。ただし、SNSでの情報は流行廃りが激しく、訂正する情報もやはり急速に浸透するので、これらの情報にはその科学的な根拠がないと直ちに否定されました。

「密輸ですよ。いろんな品物をうまく市の門を通させるんです。そうして、うんと高い値で売るんです。」(169/210)『ベスト』では、閉鎖されたオラン市の外から商品を手に入れて販売する犯罪者コタールの姿が描かれていました。コロナ渦でもマスクや消毒液が転売され、医療従事者にこれらの必需品が行き渡らない状況を打開するために、3月には国民生活安定緊急措置法が改正されて、転売が禁止されました(9月に解除)。

「ある朝ひとりの男がベストの兆候を示し、病の錯乱状態のなかで戸外へと飛び出し、いきなり出会った女に飛びかかり、おれはベストにかかったとわめきながらその女を抱きしめた。」(99/116) 極度に不安な状況において、自暴自棄な行動は起ります。実際に感染症に罹患しているかどうかは別として、「コロナをばらまく」と言って、飲食店や役所などの公的な場所で騒ぎを起こした事例がありました。

「ベストの日差しは、あらゆる色彩を消し、あらゆる喜びを追い払ってしまった。」(135/164)「近くの海も禁止された。身体はその楽しみを味わう権利をうしなってしまった。」(136/164)「〔ホテルの〕支配人の弱り込みようもこれに劣らなかった。〔…〕この町には新たな旅客はもうやって来なかったからである。〔…〕今度のベストは観光旅行の破壊であった。」(137-138/167-168) 感染症対策による自宅生活の時間が多くなり、余暇の時間は増大しました。しかし、これを解消する手段は著し

<sup>12</sup> Cf. 芳川泰久「コロナ・ウィルスと寓意小説」、『波』2020年4月号、新潮社、<https://www.bookbang.jp/review/article/623667>。坂口孝則「新型コロナの予言に満ちた小説『ベスト』が示す感染症の終わり」、幻冬舎plus、<https://www.gentosha.jp/article/15125/>。

く奪われており、人々はストレスを感じました。海や山でのレジャー活動は禁止ないし制限され、観光産業は計り知れない打撃を受けています。コンサートや観劇、スポーツ観戦の中止や制限によって、エンターテインメント業界は深刻な被害を被っています。

「〔オラン市の満員電車では〕すべての乗客は、できるかぎりの範囲で背を向け合って、互いに伝染を避けようとしている。」(142/174)「隣人に信用がおけないということ、知らぬ間にベストをもって来られたり、うっかりしているすきに病気を感染させられたりしかねないということが、人々にはあまりにもよくわかっているのだ。」(229/290) 新型コロナウイルスの第一波が到来した春、日本社会ではこうした光景が日常的でした。マスクをして、咳払いをするにも躊躇しながら、隣人との適度な距離を保つことが当たり前となりました。緊急事態宣言が解除されてから、街の人混みも満員電車が再びみられるようになりましたが、人々の心理的な距離は続いています。

封鎖されたオラン市内でベストは同じ度合いで拡散したわけではありません。その被害には濃淡があり、とくに感染がひどい若干の区域はさらに他の区域から隔離されました。「そこに住んでいた人々は、この措置を、とくに自分たちだけを目当てにした弱い者いじめみたいにみなす気持ちを抑えなかった」「ほかの地区の居住者は、〔…〕他の人々は自分たちよりもさらに自由を奪われているのだと考えることに、ひとつの慰めを見出していた。」(197/249) 感染大流行はすべての地域に広がるわけですが、その被害の差に応じて、人々の意識もばらばらになります。感染が進行した地域は敬遠され、感染が比較的ましなほかの地域の人々に優越感や差別意識を生じさせます。『ベスト』では感染症に抵抗する市民の連帯が描かれていますが、その連帯も一枚板ではなく、市民同士の分断もたしかに生じているのです。日本では感染クラスターが発生した家庭、学校、地域があり、感染者らが理不尽で激しい差別に曝される事例がありました。

感染の大流行においては、富める者も貧しい者も、老若男女を問わず、誰もが平等にリスクを負っているのでしょう。日常生活のふとした瞬間に誰もが感染し、対応次第では数日で重症化したり落命したりするのですから。疫病という宿命に曝されることで各々の肉体的脆弱さと可死性が顕わになり、社会の階層的秩序が無化されます。『ベスト』では、ホテルの支配人が自分のエレベーターで鼠の死骸（ベス

トの前触れ)が見つかったことを苦々しく思い、「私たちもいまでは、世間のみんなと同じですね」(39/43)と言い放ちます。疫病がオラン市民全員を巻き込むにつれて、特権的なこの人物も「世間のみんなと同じ」になるのです。中世のペストの最中に描かれた「死の舞踏(ダンス・マカブル)」はまさに、君主から庶民に至るまで、あらゆる人々にとっての死の平等を表現していました。

しかし、感染状況に際して、人々の状況はきわめて不平等なものと言わざるをえません。リウーは「ペストは虚弱な体格の者は見逃し、とくに強壯な体質の者を破壊すると読んだことがある」(56/65)ののですが、実際には女性や子供もペストによって落命していきます。「完全無欠な死の平等」(273/350)はたしかにあります。それは誰からも敬遠される類いの平等でしかありません。実際には、富裕層は何の不自由もなく生活を続ける一方で、貧しい家庭はさらに苦しい状況に追いやられていきます。「ペストがその仕事ぶりに示した、実行ある不公平さによって、市民の間に平等性が強化されそうなものであったのに、エゴイズムの正常な作用によって、逆に、人々の心には不公平の感情がますます先鋭化された。」(273/350)

新型コロナの蔓延で仕事を失って生存することすら困難になる者がいる一方で、この機会により一層の富を得る者もいます。感染対策のための日常生活には予想しなかった費用が次々と必要となり、私たちの生計を圧迫します。病気にかかるリスクや病気を治療する環境は社会的立場によって異なり、その不平等は世界的大流行によってより一層ははっきりしたのです。フランスの哲学者エティエンヌ・バリバルは早い段階でこう明言しています。「ウイルスの問いによって社会問題が払いのけられている、などと問うのは、大学入試問題並にご立派な二者択一だ。私たちの社会は異なる度合いで感染症に苦しんでいて、私たちは平等ではない。不平等が劇的なまでに加速していて、人間同士の相違を生み出し、人類を分断している」<sup>13</sup>。

<sup>13</sup> Etienne Balibar « Nous ne sommes égaux ni devant le risque ni devant les mesures prises pour le conjurer », *Le Monde*, le 22 avril 2020. [https://www.lemonde.fr/livres/article/2020/04/22/etienne-balibar-l-histoire-ne-continuera-pas-comme-avant\\_6037435\\_3260.html](https://www.lemonde.fr/livres/article/2020/04/22/etienne-balibar-l-histoire-ne-continuera-pas-comme-avant_6037435_3260.html)

## 自然災害と疫病

自然災害は予期せぬ形で人間に降りかかり、人間中心の尺度を揺さぶります。今回の感染症に際して、次のような一節は私たちの心に刺さります。

〔…〕彼ら〔オラン市民〕は人間中心主義者であった。つまり、天災を信じなかったのである。天災というものは人間の尺度とは一致しない、したがって天災は非現実的なもの、やがて過ぎ去る悪夢だと考えられる。ところが、天災は必ずしも過ぎ去らないし、悪夢から悪夢へ、人間の方が過ぎ去っていくことになり、それも人間中心主義者たちがまず第一に過ぎ去っていくことになるのは、彼らは自分で用心をしなかったからである。わが市民たちも人並以上に不心得だったわけではなく、謙虚な心構えを忘れていただけであって、自分たちにとっては、すべてはまだ可能だと考えていたわけだが、それはつまり、天災は起こりえないとみなすことであった。(49-50/56)

2020年2月、日本で新型コロナウイルスが蔓延し始め、同月19日に専門家会議が「感染拡大期に入ったという認識」を示してからも、私たちはこうした人間中心主義的な態度をとっていました。とりわけ、東京オリンピック・パラリンピックの開催を控えているため、政治家や評論家たちは「冬が過ぎれば終息する」「東京五輪の延期や中止はありえない」などと発言していました。しかし、3月初旬には全国の学校一斉休校の措置がとられ、感染クラスターが各地で発生するなか、同月24日に東京五輪の延期がようやく決定されました。日本政府は緊急事態宣言の発出を否定し続けたものの、4月7日にやっと宣言が出され、日本社会は約ひと月ほどの自粛期間に入りました。その後も、人間の経済的・文化的な生活を維持したいという態度は次々と裏切られ、その尺度を超える規模と速度で新型コロナウイルスの拡大は第二波、第三波とくり返されています。不謹慎な比較ですが、『ペスト』でターラーがおもわず漏らしてしまう地震と病疫の対比は示唆的です。

まったく、こいつが地震だったらね！ がっと一揺れ来りゃ、もう話は済んじゃう……。死んだ者と生き残った者を勘定して、それで勝負はついてしまうのさ。ところが、この病気の畜生のやり口ときたら、そいつにかかっていない

者でも、胸のなかにそいつをかかえているんだからね。(137/166)

自然災害にしろ、人為的事故にしろ、「カタストロフィ（破局）」は一回限りの出来事です。カタストロフィ（catastrophe）はギリシア語katastrophēに由来し、この語はkata-（上から下まで、完全に）とstrephein（回すこと）から成ります。その含意は「決定的な転換や転覆、反転」で、予期せぬ仕方では人間に降りかかる衝撃的な出来事です<sup>14</sup>。他方で、「感染（epidemic）」はギリシア語のepi（上に）とdemos（人々）に由来します。パンデミック（世界的大流行pandemic）では接頭辞がpân（すべて）となります。感染流行は一定地域、あるいは世界中にあまねく疫病が拡散した状態であり、一回限りの出来事ではありません。カタストロフィのような決定的な転換ではなく、じわじわと浸透しては突如として劇的な拡大をみせるので終わりをなかなか見定められません。治療薬やワクチンが発見されて有効な手段が講じられないかぎり、感染は終息することはありえませんが、しかも、ウイルスは別の形へと変異して何度も反復されかねません<sup>15</sup>。それゆえ、「感染症はあらゆる恐怖を集約し、絶対的な悪を具現化するほどです。それには三つの理由があり、感染症の原因を限定しえないこと、その展開を統御しえないこと、その消滅が人間の意志に左右されないこと、です」<sup>16</sup>。破局的出来事や疫病の蔓延といった制御しえないものを前にして、近代社会は技術と管理によってリスクを緩和させ、その予見可能性を拡大しようとしてきました。『ペスト』のような文学にできることは、表象や想像の力を活用することで、一定の時間と空間に限定されない物語を創造すること

<sup>14</sup> 「カタストロフィ」という言葉の系譜学的分析は、東日本大震災の後で編んだ論集『カタストロフィと人文学』（西山雄二編、勁草書房、2014年）の「序論」で記したことがあります。

<sup>15</sup> 自然災害と感染症に対する日本の経験と対策は対照的でした。地震や津波、台風などの自然災害の経験は社会的に蓄積され、行政からNGO、住民に至るまで、さまざまな対策が改善されてきました。過去の事例に照らし合わせて、災害に対する手順や態勢、備蓄がつねに用意されています。しかし、感染症に関しては、2000年代のSARS やMARSの世界的流行にもかかわらず、日本ではその教訓が社会的備えとして活かされていません。その結果、行政の場当たりの対応が目立ち、専門家と行政の連携も効果を発揮しませんでした。Cf. 西田亮介『コロナ危機の社会学』、朝日新聞出版、2020年、16-20頁。

<sup>16</sup> Aurélie Palud, *La contagion des imaginaires, L'héritage camusien dans le récit d'épidémie contemporain*, op. cit., p. 27.

で、より普遍的な視座からこうした説明しえない事象の意味や価値を判断することです。

### 未知なる災厄を巡る議論

『ペスト』では疫病による死者が数十名出てから、県庁に保健委員会が招集され、今後の対策をめぐる議論がなされます。得体の知れない災厄が社会に起こったとき、政治家や専門家らがどんな話し合いをするのかが示されていて、興味深いくだりです<sup>17</sup>。

まず、県知事は「空騒ぎ」だと確信して、「お望み通り、早いとこすますとしましょう、ただし黙々とね」(61/70)と言い放っています。彼はペストへの行政上の対策をあえて先延ばしにすることで話を大げさにせず、風評を最小限に抑えたがっています。

医師リシャルは科学的知見からの確な判断を下そうとする理知的な人物です。彼はあくまでも「一連の分析の統計的な結果」を待ってから、ペスト感染の事実を公表すべきだとします。リシャルの見解は穏当なものでした——「はっきり法律によって規定された重大な予防措置を適用しなければならない。ペストであることを公に確認する必要がある。ところが、この点に関して確実性は必ずしも十分ではないし、したがって慎重考慮を要する」(63-64/74)、と。

こうした煮え切らない議論に対して、主人公リウーは、「しかし、私としては、それがペストという流行病であることを、みなさんに公に認めてくださることが必要なんです」、「問題の設定が間違っていますよ。これは語彙の問題じゃないんです。時間の問題です」(64/75)と卒然と語ります。切迫したリウーの言葉とは相反しますが、想像しえない事態を名づけること、つまり、「語彙の問題」もまたないがしろにされてはいけません。行政や専門家が事態を名づけることではじめて人々の不安は緩和され、理性的な行動をとることができるからです。リウーが主張するペストに対処するための時間とは、すでに発生している感染の言語的認知を超え

<sup>17</sup> 東日本大震災の後、福島原発の事故を踏まえて、映画『シン・ゴジラ』(2016年)が製作されました。この特撮映画の前半にも、巨大な生物への対策をめぐる行政側の会議風景が描かれています。政治家や若手官僚、専門家らのあいだで議論が延々と交わされ、社会が制御しえないものに対する各人の立場と考え方が披露されます。

て、私たちの想像を超えた速度で今後も進展し続ける疫病を想定する時間のことです。リウーはこう断定します。「つまり、私たちは、この病があたかもペストであるかのごとくふるまうという責任を負わねばならないわけです」(65/76)。政治的な狡知を打算的に思案する県知事、科学的知見から現実的な対策を重視する医師リシャールに対して、リウーは「かのように (comme si)」というフィクション的な想像と行動に訴えかけます。潜在的に進行する感染拡大の現実に対して想像力によって先回りをすることで、彼は最良の実践的行動を促そうとします。

こうした「かのように」の論理は新型コロナウイルスにも有効でしょう。斉藤環は「コロナ・ピューリタニズムの懸念」(『コロナ後の世界』、筑摩書房)において、コロナの時代に求められる適切なマナーを、「あなた自身がすでに感染している前提でふるまいなさい」(81頁)としています。新型コロナウイルスの場合、感染後、発症するまでの潜伏期間が平均5～6日で、感染しても3～5割の人は症状が出ません。無症状でもウイルスが日常生活のあらゆる場面に潜んでおり、私たちの途切れない警戒心が人々の共同性の姿を変容させています。「この教えはまるで「原罪」意識の示唆に似てはいないか? […] 自身が罪を犯した(感染した)という事実の有無にかかわらず、自身には罪があるという前提で考え、ふるまうことが社会的に要求される疾患は、これが最初のものではないだろうか?」(81頁)と斉藤は問うています。斉藤の懸念は、こうした態度がコロナ感染に対する過度の警戒心となり、重苦しい倫理的な行動を促していることです。「問題があるとすれば、この要請が、純粹に医学的なものであるにもかかわらず、きわめて倫理的な要請に似て見えるという点だ。私たちは今、医学や科学の名において、かつてない規模と程度で倫理的にふるまうことを強く求められているのではないだろうか」(84頁)。日本ではこうした倫理的振る舞いが、コロナ感染を軽視する(しているように見える)人々への批判や叱責として現れ、「自粛警察」という呼称さえ生まれました。『ペスト』では、「かのように」の論理は、新たな感染者を食い止めるべく疫病と闘う人々の連帯を促進しています。

### 「自宅への流刑」

現在のコロナ禍の経験として、第二章で描き出される別離と追放の描写は実に生々しく感じられます。ペストの発生が公式に確認されたあと、オラン市が閉鎖さ

れ、人々は隔離状態におかれます。「〔市門の閉鎖によって〕そんなつもりはまったくなかった人々が突如別離の状態に置かれた」(83/96)といった状況は、新型コロナにおける都市封鎖や外出制限を思い出させるのです。『ベスト』の場合、交通網が停止し、文通が禁じられて電報のみが許可されます。現在では情報技術メディアが発達しており、音声と映像を介した交流が維持されるので、この小説の状況と比べるといくぶんましであることがわかります。ただ、親兄弟、友人や恋人と物理的に会えないことはやはり苦痛です。「市民一同は、自分が身につけていたかもしれない、別離の時間を計算するという習慣をいち早く、公開の場所においてさえ、捨ててしまった。」(89/103) 別離は再会への約束があるからこそ耐えられるものですが、終わりのみえない隔離生活は別離の計算を宙吊りにすることで、私たちを根本的な不安に陥れます。カミュは実存的な不安を描くのに長けた作家ですが、このあたりの描写は現在の私たちの琴線にも触れます。過去の思い出が再会への希望となるのですが、そうした記憶も色褪せていき、「何の役にも立たない記憶を抱いて生活するという、すべての囚人、すべての流刑者の深刻な苦しみ」(90/104) に変わっていきます。隔離生活は「流刑といっても、大多数の場合、自宅への流刑」(90/105) なのです。

コロナ禍で私たちも経験した隔離状態ですが、遠隔情報メディアによってコミュニケーションが発達した現在においてもなお、不安に駆られるのはなぜでしょうか。哲学者クレール・マランは長い療養生活の経験から、電話やSNSのおかげで今回の隔離生活はまだ贅沢なものだと言います<sup>18</sup>。入院患者や退職した老人の生活の日常、つまり、屋内にいて、来客がほとんどいない生活のことにみなが今回気づいたはずです。この隔離生活の不安は他人と出会えないこと自体ではなく、自分のアイデンティティの承認が難しくなる点に由来します。マランによれば、「私たちは自分の社会的な役割に慣れていても、隔離生活によってこの役割が失われてしまいます。承認のための要因を失うのです。同じひとつの空間であらゆる人物を演じなければならないのは実に困難です。バリのアパートで、私は同時に母親、八歳の娘の先生と遊び相手、遠隔授業をする教授でいなければなりません」。私たちは日常的

<sup>18</sup> Claire Marin « L'intensité des relations revient, pour le meilleur et pour le pire », *Philosophie Magazine*. <https://www.philomag.com/articles/claire-marin-lintensite-des-relations-revient-pour-le-meilleur-et-pour-le-pire>

に移動し、さまざまな人と交流することで、社会的な立場をその都度演じています。隔離生活で移動が制限されると、私たちは同じ場所に留まったまま、異なる役割を果たさなければなりません。社会生活において、移動と承認はきわめて重要な要素なのです。

### 単調な数値データのなかで生きる人々

長きにわたる疫病との闘いにおいて、状況を把握するために科学的な知見に基づいたデータが有益です。新型コロナウイルスが到来した日本ではPCR検査の数があまりにも少なく、本当の感染者数が把握できていないのではないかと不安が募りました。『ペスト』では、感染者数の公表によって人々の意識が一変します。「要するに、誰かが合計を出すことを思いつきさえすればよかった。合計は驚倒すべきものであった。わずか数日の間に、死亡例は累増し、この奇怪な病を手がけている人々にとっては、それがまぎれもない流行病であることは明白となった。」(47/53) 感染の現実とは抽象的な数字の推移によって説明されるしかなく、私たちは日々、新規感染者、回復者、病床使用率、重症者、死亡者といった統計情報を注視するしかありません。

作家・哲学者のトリスタン・ガルシアは、こうした感染症の状況から、私たちが遍在的な危機の状態にいると診断します<sup>19</sup>。従来の危機は歴史を画する出来事として生じ、それ以前とそれ以後で時代が変化するとされてきました。2001年のニューヨークでの同時多発テロは、テロリズムとそのスペクタクル、テロとの戦いといった諸相を変容させてしまいました。ガルシアによれば、2007年に起こったサブプライム住宅ローン危機以来、私たちはむしろ潜在的で遍在的な危機の状態に置かれ続けています。ある危機的な出来事ならば歴史の流れを寸断し、その後どんな可能性が開けるのかと未来を垣間見させてくれます。「ところが、私たちはいま、連続したカーブ（症例数や死者の数のカーブ）に釘付けになっています。カーブに従って、全体の軌道や屈折といった表現で推論しています。ですから、私にとって、問いは『隔離生活が解除されると何が変わり、何が始まるのか』ではありません。む

<sup>19</sup> Tristan Garcia « Au lieu de nous unir, l'épidémie accentue ce qui nous différencie », *Philosophie Magazine*. <https://www.philomag.com/articles/tristan-garcia-au-lieu-de-nous-unir-lepidemie-accentue-ce-qui-nous-differencie>

しろ『何が継続されるのか、何の方向が変わるのか、何が増大するのか、何にアクセントが置かれるのか』です。「コロナ以前／以後」といった歴史の断絶ではなく、これまで感染症が繰り返されてきたことを踏まえて、この危機の深化や増大、屈折を考え直すことが重要なのです。

さて、数値データによって感染状況が抽象的に把握される一方で、感染対策を第一に考えなければならない日常生活は単調なものになります。『ペスト』ではそんな単調な抽象との戦いが強調されます。「なるほど、不幸のなかには抽象と非現実の一面がある。しかし、その抽象がこっちを殺しにかかってきたら、抽象だって相手にしなければならない。」(107/129)「ペストというやつは、抽象と同様、単調であった。」(109/132)現在のコロナ禍では社会的距離を保つために他者との親密感がなくなり、マスクを常時着用するせいで相手の表情が見えなくなります。会話や食事は控え目に済ませて、大人数で大声を出すことは押さえなければなりません。『ペスト』では、「一人一人の幸福とペストの抽象との陰鬱な戦い」のなかで、「抽象と戦うためには、多少抽象に似なければならぬ」(110/133)と記されています。疫病そのものと戦うというよりも感染拡大によってもたらされるこの単調さこそが厄介な課題です。悪に打ち勝つ善という英雄主義的な二元論をとらず、疫病の側に多少似るという態度をカミュが示していることは重要です。抽象的な生活を強いられるなかで、絶望に陥ることなく（「絶望に慣れることは絶望そのものよりもさらに悪い」(211/268)）、それでもどうしても馴染まない点は何なのかを意識することがこの「陰鬱な戦い」の出口を見つける術になるでしょう<sup>20</sup>。

<sup>20</sup> ペストは当初、「うまく機能する、用心深くて遺漏のない行政事務」(209/265)のごとく感染を広げ、死者が増大するにつれて「その日々の殺戮に、律儀な官庁職員のような正確さと規則正しさを示す」(271/348)ようになります。ジャンイヴ・ゲランが解釈するように、これは「拡大していく全体主義的な動向を表現したもの」(Jean Yves Guérin, *Albert Camus : Littérature et politique*, Honoré Champion, 2013, p. 174)と感じられます。冷徹なペストが社会全体を覆い尽くすと、オラン市当局は感染者や死者をもはや人道的に対処しきれなくなります。感染者を隔離施設に効率よく閉じ込め、死者を手際よく火葬するといった事務的かつ技術的な手段がとられるようになります。今日のコロナ禍では、「全体主義的な動向」は情報技術を通じて進展しており、健康のためにプライバシーを犠牲にするという管理体制が強化されています。しかも、人々は監視テクノロジーによる統治をむしろすすんで受け入れているようにみえます。『ペスト』からは、人々がみずからの実存を全

## 災厄とヒロイズム

『ペスト』は神なき不条理な世界に生きる人間の実存と連帯を見事に描いた小説です。人間の苦しみが宗教的救済によって癒やされ、不幸の真実が解き明かされるわけではありません。天災にしろ、人災にしろ、生じてしまった悪は私たち人間の業によるものであるという宗教的な解釈はなされません。

こうした悪の非宗教的な解釈はパヌルー神父の二度の説教の変化によって示唆されています。

神父は五月末の土砂降りの日に多数の一般人を前にしておこなった説教で、ペストの到来をキリスト教的視点から説き、これを神の慈悲による罰と説きます。「みなさんを苦しめているこの災禍そのものが、みなさんを高め、道を示してくれる」(118/143)というわけです。しかし、神父はオトン判事の子供がペストで苦悶しながら絶命する姿に衝撃を受けます。無垢な子供の苦しみに納得できないまま、十月のある大風の日におこなった説教では、前回の説教は真実だが、「慈悲の心なく考え、かつ、言った」ことを反省します。「あなたがた」という一方的な呼びかけをやめ、「私たちは」と語る神父は聴衆と同じ立場でみずからの信仰心を試しています。「みなさん。その時期は来ました。すべてを信じるか、さもなければ、すべてを否定するか、です。そして、私たちのなかで、いったい誰が、すべてを否定することをあえてなしうるでしょうか。」(259/331) 神に対するパヌルー神父の立ち位置が変わるとともに、神への愛は不可能とは言わぬまでも実に困難な試みとなります。ペストという災禍は神の恩寵的試練という意味合いを失い、人々が直面する純然たる悪となるのです<sup>21</sup>。

宗教的・道徳的な説明が退けられ、疫病が世界の不条理さとして現れるなかで、あくまでも人間的な闘いと連帯が重要となります。「人々を力づける何らかのヒー

---

体主義的な管理・統治に委ねてしまうのではなく、個々の脆弱さと孤立が連帯と反抗をいかにしてもたらすのかを考えさせられます。

<sup>21</sup> スーザン・ソントグは『ペスト』のそうした構造をこう評しています。「カミュの小説は、ときおり言われるのとは違って、地中海のある港町に発生した腺ペストがナチの進駐をあらゆる政治的寓意といったものではない。ここでのペストは報復性をもっていない。カミュは何かに抗議しているのではないのだ、腐敗にも、暴政にも、さらに道徳のあり方にも。」(スーザン・ソントグ『隠喩としての病 エイズとその隠喩』富山太佳夫訳、2012年、149頁)

ローやめざましい行動」は「古い物語にみられるものに似て」(209/264) いるのであって、単純なヒロイズムはリウーによってはっきりと退けられます。

〔リウー〕「今度のことはヒロイズムなどという問題じゃないんです。これは誠実さの問題です。こんな考え方は笑われるかもしれませんが、しかし、ペストと戦う唯一の方法は誠実さということです。」

「どういうことです、誠実さってというのは」と、急に真剣な顔つきになってランベールは言った。

「一般的にはどういうことか知りません。しかし、僕の場合には、自分の職務を果たすこと〔faire mon métier〕だと心得ています。」(191/245)

東日本大震災の際にも『ペスト』は再読され評価されました。世界の不条理な現実を前にして、誠実に自分の職務を果たすことで他者への貢献を成し遂げるというリウーの態度にも注目が集まりました。辺見庸は震災直後に『ペスト』を引用して、「混乱の極みであるがゆえに、それに乗じるのではなく、他にたいしいつもよりやさしく誠実であること。悪魔以外のだれも見てはいない修羅場だからこそ、あえてひとにたいし誠実であれという、あきれるばかりに単純な命題は、いかなる修飾もそがれているぶん、かえってどこまでも深玄である」<sup>22</sup>と評しています。

『ペスト』ではたしかに、アンチヒーローの観点から、きわめて人間的で凡庸な人物の活躍が肯定的に描かれています。リウーの場合、彼の仕事は医師であり、感染症に対抗するために必要不可欠な職種です。「自分の職務を果たすこと」の内実は日常においても、また、この非常時においても変わりません。彼は人々の肉体を物理的にケアするだけでなく、社会をもケアする医師になるのです。また、公務員グランは目立たない存在ですが、感染対策として登録や統計の仕事に貢献することで、「衛生隊をリードしていたあの平静な美徳の事実上の代表者」(159/197) たりえています。

ただ、感染流行した社会において、「自分の職務を果たす」ことが他の人々以上に危険となる仕事はあります。医療や食品販売、物流や交通などに携わるエッセン

<sup>22</sup> 辺見庸「震災緊急特別寄稿」、『北日本新聞朝刊』、2011年3月16日付。

シャル・ワーカーです。『ペスト』でも、私たちの日常生活に必要な不可欠な仕事をおこなう人々が被った悲惨のことは描かれています。「最初は正規の、のちにはにわか仕立ての看護人や墓掘り人夫も多くの者がペストで死亡した。」(205/260) また、疫病によって多くの人々が失業し、その職務が奪われていきます。「経済生活のすべてを狂わせ、相当多数の失業者をもたらした。〔…〕下層の仕事のほうは事情が楽になった。〔…〕困窮が恐怖に勝る力を示す様子がつねにみられた。」(206/260) 失業者が日々の糧を得るために「下層の仕事」に就かざるをえないという状況は、コロナ禍でもみられる現象です。たとえば、需要が増した宅配業に不本意ながら仕事を求める人が増えていますが、低賃金で労災補償といった保護がない場合も少なくはありません。「自分の職務を果たすこと」という「誠実さ」が不条理な疫病に対する闘いの信念になりうるとしても、しかし同時に、「自分の職務」を奪われた人々の誠実さのことにも思いを寄せざるをえません。

#### 歴史を通じて反復される感染大流行

ペストの症状は古代ギリシアのペロネソス戦争時にすでに確認されており、6世紀半ばに東ローマ帝国でも大流行し、皇帝ユスティニアヌス1世も感染しました。14世紀にも大流行を引き起こし、中国から中央アジアに至るまで拡散し、ヨーロッパでも猛威を振るったことはよく知られています。19世紀末から20世紀にかけて、中国で発症したペストは世界各地に広がり、日本でも感染が広がりました。ペストのラテン語pestisは「疫病」一般も示しますが、歴史を通じて人間を苦しめてきたペストは悪疫の代表的な存在です。『ペスト』でも過去の歴史の場面を想起する記述があります。「かの災禍の古めかしい幻〔…〕ペストに荒らされ、鳥一匹住まなくなったアテナイ。声もなく断末魔にあえいでいる人々の充満したシナの町々。汁のしたたる死体を穴のなかに積みあげているマルセイユの徒刑囚たち。」(52/59) 突然発生して社会を一変させる疫病に私たちは驚きますが、歴史的に見れば前例があることで、先の疫病から学ぶことができます。

直近の前例としては、2002～03年にアジアやカナダを中心に感染拡大した重症急性呼吸器症候群（SARS）があり、2012年には中東呼吸器症候群（MERS）が中東諸国で蔓延し、欧州にも感染が広がったことは記憶に新しいです。藤原辰史はいち早く、20世紀初頭のスペイン・インフルエンザの先例と比較して、歴史的な教訓を

引き出しています<sup>23</sup>。スペイン・インフルエンザは第一次世界大戦中の1918年から1920年までに感染流行を三度繰り返し、世界中で一億人が亡くなったとも言われています。100年前の疫病の教訓として、感染は一度では終わらず長期化し、何度も感染流行が反復されること、もっとも困難な現場に立たされる医療従事者へのケアを怠ってはいけないこと、情報の透明な開示が重要であることが示されます。とりわけ、歴史の忘却に関する次の指摘は重く響きます。「スパニッシュ・インフルエンザは、第一次世界大戦の死者数よりも多くの死者を出したにもかかわらず、後年の歴史叙述からも、人びとの記憶からも消えてしまったこと。それゆえに、歴史的な検証が十分になされなかったこと。新型コロナウイルスが収束した後の世界でも同じことにならぬよう、きちんとデータを残し、歴史的に検証できるようにしなければならない。」

『ペスト』において重視されるのは疫病の記録です。物語の結尾で主人公の医師リウーが本書の出来事の語り手であることが明かされますが、彼はいわば厳正な歴史家という記述者の立場にあります。ペストの感染とその犠牲者に寄り添い続ける善意の証言者です。また、『ペスト』には別の記述者もいて、若者タルーもまたオランの町に着いてから、日々の出来事をノートにとっています。彼の方はむしろ「些末な事象に偏るといふ方針に従っているようにみえる、実に特殊な記録」を残し、「物語のないものについての語り手」(34/36) たらうとします。疫病は一度で終わることなく、将来もまた発生するからこそ、人間ができることは自分の闘いと連帯を記録し、後世に正確に伝えることなのです。「リウーが勝ち得たことは、ただ、ペストを知ったこと、そしてそれを思い出すということ、友情を知ったこと、そして、それを思い出すということ、愛情を知り、そしていつの日かそれをまちがいなく思い出すということである。ペストと生との賭けにおいておよそ人間が勝ちうることのできたものは、それは知識と記憶であった。」(335/431)

『ペスト』は、疫病から解放されたオランの町が祝賀の花火で彩られる場面で見幕を閉じます。しかし、犠牲者の側に立って行動し続けた友人タルーは看病の甲斐もなくペストで命を落とし、リウーは妻が数日前に亡くなったとの電報を受け取りま

<sup>23</sup> 藤原辰史「パンデミックを生きる指針——歴史研究のアプローチ」、ウェブサイト「B面の岩波新書」、2020年4月2日。https://www.iwanamishinsho80.com/post/pandemic

す。町中が祝勝の雰囲気であふれかえるなか、喪失感に見舞われているリウーは、「人間のなかには軽蔑すべきものよりも、賛美すべきものの方が多くある」(355/457) としながらも、来たるべき災厄の予感を綴っています。「おそらくはいつか、人間に不幸と教訓をもたらすために、ペストがふたたびその鼠どもを呼びさまし、どこかの幸福な都市で死なせに差し向ける日が来るであろう。」(355/458) このように『ペスト』は終わりのない結末で閉じられることで、疫病との闘いと記録の問いを、コロナの渦中にある私たちに投げかけています——「こいつの正体はまた繰り返すこと [ça consiste à recommencer]」(189/241) なのですから。